

小荷駄装束

伊藤幸子 岩手

除雪車の爪黒々と洗ひ上げ今期最後の号令高し
淡冶なる春山笑ふ八幡平ゲートの鎖錠いま外さるる
黄と青のウクライナ国旗の花の色咲きてわが庭昼を静けし
チャグチャグの小荷駄装束風やめば馬のまなこのゆつくりと閉づ
産直の木小屋に昼の雨そそぎ夕顔の肌ほうとなまめく

この世のしづく

金子智佐代 茨城

七七日に向かふ磐越道は雨 天の怒りのごときどしやぶり
こんじきの天蓋のもと声わか息継ぎふかき般若心経
納骨のほんのひととき雨止みて雫かがやくこの世のしづく
姑の部屋にははの見て来し安達太良山をはは亡きははの窓にわが見る
椴の木がむかしありたる庭のはし花に膨らむ栗の木が立つ

犬小屋

神保外子 埼玉

ご近所の犬るなくなり犬小屋をほたるぶくろが咲きつつみたり
ゆきやなぎゆらゆら咲ける遊歩道われを旧姓で呼ぶのは誰か
袋小路多き故郷を思ひつつ引き返すことを苦にせず今も
はるかなる戦中戦後、裏庭で兄と竹の子掘りしふるさと
行つてきます只今と声に出して言ふひとり暮しは二十四年目

もう敵わない

小倉

敬* 神奈川

再任用意向調査書とりあえず（希望あり）へと丸つけておく
二ℓのボトルの水を流し込むこの若きらにもう敵わない
庭仕事日和だ かくもよく晴れた土曜日なのに病院にいる
一時間口はさまずに愛想よく座って自治会会議は終わる
（売れてます！）値札の上に踊る文字 ピールの缶へ手は伸びてゆく

歩く

岩崎 佑太 東京

歩けない祖母をのこして歩く朝かたはらをゆれやまぬあぢさゐ
ゆれやまぬあぢさゐの群れ見つめをりゆるされすぎてわれはひとりきり
人頭大のキャベツ刻めば途中からわれがずんずん分からなくなる
よく死ぬはよく生きるよりむづかしいかもしれないなくて上弦の月
一週間の入所に祖父を送り出すビニール袋とぶ風の朝

鮭を食ふか

黒石 孝 新潟

痛む足サポーターで絞めもう少し励め、リタイアまで三日ある
はや我を頼まず動き出してゐる利口者なり組織といふは
人生の締めの部分に來たりけり肩書きのなき一人あるく
常識で膨らむ老いの脇腹をヤマゲラの声小さくつつく
ゴキブリを目出度く仕留め明日の夜は鮭を食ふかと子に諮りをり

新一年生

齊藤淳子 長野

スクワットして太股を鍛へつつ拷問死せし多喜二を思ふ
スクワットして太股の引き締まる朝はトロットで野を走りたし
回答に窮する問ひをもちて来し新一年生たのしみな子だ
雨後の日を浴びて膨らむ桃の木よ処女航海を待つ帆のごとく
梅雨寒の空にツバメの姿なく急降下してゆく円の価値

銀のしづけさ

今井由美子 岐阜

時止めてゐるやうに降る糠雨に無人駅舎のしづもり深し
フルートは春野に生れし風音が若き奏者に喝采の渦
波音を聴きしおもひにたたずめりあたりいち面ネモフィラの海
もう踊ることなきままに柵に置くダンスシューズの銀のしづけさ
見つめるは夢のあとさき ほうたるのほの蒼き灯は螺旋に消えて

ふくろふ

藤田倫夫 三重

〈黙想〉の姿勢つづけてふくろふは梅雨の日本の明日を見通す
さびしくて梅雨の卵の黄身押せば押しかへしくる汝もさびしいか
濃くおもく青葉かさねて木犀は黄金きんのかをりを溜む梅雨の日々
いちにちが瑣事に追はれて流れたり〈余白〉にけふも縁なく
攻めて来る国へと架くる太き虹に鳩添へて描くウクライナの子

塩の結晶

竹内 みどり 鳥取

梅干しの暗き甕にて育ちゆく六面体の塩の結晶
塩漬けの梅に貼りつく結晶の透明とほき憧れに似て
塩原^{えんげん}に斧振りおろす「塩の民」ダナキル砂漠の極熱のなか
鳴き声は砂漠に満ちむ千頭のラクダが岩塩積み込むあひだ
梅の木が草むらに実を落したりそのひそかなる熟思の重さ

水無月の空

中村 麗子 鳥取

スーパリーの三十円の魚フライ「ゴースト・フリート」うかびくるなり
復帰の日をすぎればまたも忘れられ基地の島なりとほきオキナワ
ときに諭しときに諭され友情は椎の若葉のかがやきに満つ
夕空をちちははの声翔^{かけ}りくる栗の花穂に手まねきされて
風立てばちちははの声とほざかり濃紺となる水無月の空

くれなるやさし

吉里 幸雄 福岡

母の日を子らもあはれよ受付に花束とチョコ預けきしとぞ
草いちご摘めば指^{あゆび}ににじみしも自然^{ねん}のものくれなるやさし
古い耄れの顫ふ手で遣る突^つ支^かひを胡瓜も蕃茄^{ぼんか}も悦べよ、なあ
朝採りの胡瓜を洗へばさなす昼餉にひとり焼塩で食ふ
石段のくだりで膝がゑらぎたり「山笑う」とは訳がちがふぞ